

2015-2016 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 8月

作成者：小野真彩

作成日：2015年9月5日

皆様、初めまして。この度2015年度の福井県奨学生としてフィンドレー大学に留学させて頂いております、小野真彩（おの まあや）と申します。奨学生としてこのような素晴らしい機会を頂けたことを心から嬉しく、また光栄に感じております。これから約9ヶ月間のフィンドレーでの生活や学び、活動をこの報告書で、福井県の皆様を初めとし、この留学を支えてくださっているすべての方々への感謝の気持ちをこめて執筆していきたいと思っております。また、この報告書を通じて、1人でも多くの方にフィンドレー大学や福井県奨学制度、国際交流に魅力を感じて頂ければ幸いです。

【自己紹介】

私は現在、福井大学医学部医学科の4年生です。今学期から大学を休学して留学に来ています。医学部の学生が大学を休学するというのはあまり一般的なことはありません。しかし、大学在学中に多様な価値観を知ること、他分野の学問に触れること、そして国際語である英語を身につけることが、将来の医師としての資質を磨き、また可能性を大きく広げてくれると考え、長期留学を志すことを決断致しました。この留学を一つのステップとして、将来は国内外の医療機関で学び、幅広い視野を携えて人々の心に寄り添い、地域に貢献できる医師になることが私の目標です。

【フィンドレー大学の魅力】

8月は、こちらに到着するやいなや、オリエンテーションや履修手続き、新入生イベントで慌ただしく毎日が過ぎていきましたが、私はフィンドレー大学がとても好きになりました。この大学での留学生活の魅力について、まずいくつかお知らせしたいと思います。

・自然豊かなキャンパス

こちらにきてまず感動したのは、緑豊かなキャンパスです(写真)。キャンパス内には色とりどりの花が至る所に植えてあり、とても綺麗です。野生のリスやウサギがあちこちで追いかけてっこをしたり木の実を齧ったりしている様子は大変愛らしく、日々癒されています。また、その緑を保っている庭師さん達もいつも良い表情で、私も日々をより楽しもうとパワーを貰っています。



・教授と生徒の距離が近い

フィンドレー大学の教授の先生方は皆優しく、とてもフレンドリーです。授業履修登録期間に、いろんなクラスの授業を聴講したのですが、どの先生もユーモアを交えながら生徒の心を惹き付けていたのが印象的でした。また私が驚いたのは、授業の履修作業で困っていた時にたまたまその場に居合わせて少し話しただけの幾人かの先生から、「その後どうですか？また何か困ったことがあればいつでも聞いてくださいね」といった内容のメールが、後日個人的に届いていたことです。教授の先生がこれほど暖かく生徒1人1人のことを気にかけて下さるのは、少人数教育をモットーとした大学ならではの、また、フィンドレー大学の校風のひとつとも言えるのではないかと思います。

・フィンドレー大学には日本語学部がある

フィンドレー大学には日本語を学んでいる学生がいます(写真)。これは、私達日本人留学生にとって、フィンドレー大学に留学にきて良かったと思える1つの大きな要素だと感じま



す。お互いの文化や言語を教え合うことは大変楽しく有意義で、一緒にいるうちにどんどん仲良くなり、良きパートナーになれます。8月是一緒に買い物に行ったり、それぞれの国の伝統的なゲームをしたり、Cedar Point という遊園地に行って多くの楽しい時間を共有しました。これからも、お互いに学び合い高め合いながら彼らと良い時間を共有していきたいと思います。

・これまでの奨学生の先輩方が紡いできた繋がりがある

新しい仲間を作るのに最も良い方法のひとつは、友達の友人を紹介してもらうことだと思います。私が日本で渡米にむけて準備している期間に、以前の奨学生やフィンドレーに留学していた先輩方が現地の学生を何人か紹介してくれました。日本ではメールのみでやりとりしていたので、渡米して彼らに会うことは私の大きな楽しみの一つでした。こちらに来ると、その学生がまた他の友達を紹介してくれ、その連鎖でこの1ヶ月は友好の輪がどんどん広がりました。さらに、昨年度の奨学生の先輩が履修していた授業の先生の一人もまた私のことを気にかけてくれ、課外授業に誘ってくれました。これら先輩方が紡いで下さったご縁のおかげで、私はとても良い留学生活のスタートを切ることができたように思います。人と人との繋がりがあると共に、奨学生の先輩方に感謝の気持ちで一杯です。



【世界各国からの留学生】

新入生イベントを通じて、多くの留学生とも友達になりました。各国から来ている留学生の間にはなにか、“マイノリティーの絆”のようなものがある気がします。笑顔と初めの挨拶を交わす少しの勇気があれば、瞬く間に友達になれます。“Where are you from?”といった会話さえ始まれば、次に会ったときにはもう“How are you?”と挨拶を交わす仲です。私がこの1ヶ月に出会った留学生は、インド、ネパール、サウジアラビア、ヨルダン、エジプト、中国、韓国、北朝鮮、モンゴル、ロシア、スペイン、スウェーデンと実に多彩です。私の名前（まあや）の音が、ネパールの言葉で“Love”を意味するコモンネームだという話で盛り上がり、ネパールの友達がたくさん出来ました。また、インドの言葉では、「この世の始まり」や「幻想の世界」を意味するそうで、インドの友達もまた増えました。良い名前をくれた両親に、改めて感謝です。

【～KAKE Japanese festival～】

8月の末に、この大学に約3週間のプログラムで来ていた日本人学生が主催した日本文化紹介のイベントに参加しました(写真)。お好み焼き、折り紙、そろばん、書道のブース、日本のダンス紹介があり、私は書道のブースとソーラン節の踊りを担当しました。イベントは大盛況で、ソーラン節はアンコールを頂いて2回目はお客さんの学生とも一緒に踊りました。書道のブースでは、「自分の名前を日本語で書きたい!」という学生がたくさんいて、私達がお手本を書いて、それを見ながら実際に書道に挑戦して頂きました。書き終えて嬉しそうにそれを持ち帰る姿を見て、私はとても幸せな気持ちになりました。各国の人が自国の文化に興味を持ち、それを楽しんでもくれることがこんなにも嬉しいことだとは知りませんでした。これから日本の文化への理解をより一層深め、もっと魅力を伝えたいと強く感じたイベントでした。



今月の報告は以上です。福井県とフィンドレー大学を繋ぐ良き架け橋となれるよう、これからも1日1日をしっかりと踏みしめて歩んでいきますので、今後どうぞよろしくお願い致します。

※ 本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

作成者：小野真彩

作成日：2015年10月2日

こちらでの大学生活が始まって早くも1ヶ月半が経ちました。9月に入り、暖かかったり肌寒かったりと不安定な気候が続いていますが、毎日健やかに過ごしています。今回の報告書では、住まい、授業、今月参加したイベントのひとつについてお知らせしたいと思います。

【住まいについて】

フィンドレー大学の敷地はかつて住宅地だったそうで、キャンパス内には当時の建物のおおよそがそのまま残っています。私はそのひとつである一軒家、グループハウスを12人でシェアして住んでいます。部屋は比較的大きく、ハウスメイトの学生も皆人柄が良いので、本当に良い住まいに恵まれたと感じております(写真)。



・楽しいハウスメイトとの週末

12人のハウスメイトのうち、私を含め2人が日本人、あとの10人はアメリカ人です。こちらの学生、特に私のハウスメイトはオンとオフの切り替えがとてもはっきりしていて、平日は早寝早起きをして勉学に勤しみ、週末は羽をのばして遊びます。金曜日や土曜日の夜にはリビングに集まって、パンケーキ会や、映画鑑賞会などをして楽しんでいます。

・気の合うルームメイト、思いやりの大切さ

ハウス内の部屋は殆どが2人部屋です。私にもルームメイトがおり、彼女はフィンドレー大学が位置するオハイオ州の出身で、薬学部の学生です。帰宅すると、彼女はその日学校であったことなどをたくさん話してくれます。私の英語力はまだまだ劣りますが、とにかく伝えたことを拙い英語でも構わず話し、ささいなことで笑い合ったり、お互いの趣味である音楽を通じて毎日仲良く過ごしています。何より、彼女はとても優しく親切です。英語の勉強をサポートしてくれるだけでなく、私が課題に追われている時には、何か軽食を買ってこようか？などと声をかけてくれます。ある朝には、私のゴミ箱の中身が空になって新しい袋がセットされていました。彼女が自分のゴミを出す時に一緒に捨ててくれたのです。

彼女とのコミュニケーションから、言語や育ってきた文化が違えども、伝えたいと思う気

持ち、そして小さな思いやりの暖かさが人と人を繋いでくれることを日々実感しています。

【授業について】

フィンドレー大学には、英語集中コース、学部コース、大学院コースがあり、私は学部のコースで現地の学生や留学生と一緒に授業を受けています。今学期履修しているのは、ライティング、リーディング、心理学、Experience in Japanese、Creative Dramatics、そして、ボイスレッスンの授業です。どの授業も大変興味深く報告したいことがたくさんあるのですが、今回は Experience in Japanese の授業について詳しくお知らせしたいと思います。

Experience in Japanese は、日本人留学生と現地学生が半数ずつのクラスで、主にアメリカと日本の文化の違いについて一緒に考えながら学んでいます。9月の授業では、グループになってお互いの国の料理をつくってご飯会を開いて食文化や作法について話し合うことが課題でした。私達は納豆巻きと新香巻きを作り、ペアのアメリカ人学生はデビルド・エッグというアメリカの家庭の鉄板メニューを作ってくれました(写真)。現在は、「遠慮」「和」「もったいない」「縦社会」などのトピックについてグループ学習をしています。日本で当たり前だと思っていたことが、アメリカではどんな点で違い、どんな点で似ているのかについて、またそれぞれの国のアイデンティティーや文化背景について、深く考えさせられます。



また、授業以外にも医学英語の教科書を購入し、英語の医学専門用語についてその語源や成り立ちから学んでいます。これは今後、医療の現場で英語を使っていく上で大変重要なので、今後も励んで学習したいと思います。

【～Buddy Walk～】

フィンドレー大学には多くのクラブがあります。日本の大学のサークルや部活とは種類が少し異なり、地域活動やピア・エデュケーションに根ざしたものが多く、自分の関心があるクラブに何個でも所属することができます。私もいくつかのクラブに所属することを決め、今月はクラブ活動の一環で Buddy Walk というイベントに参加しました(写真)。

Buddy Walk は全米ダウン症協会によって 1995 年に始められたもので、ダウン症への理解と社会的な平等を促進することを目的に世界的に行われているイベントです。今回私達が

参加した Buddy Walk は、オハイオ州立大学で行われました。校庭にかぼちゃに絵を書くブースやくじびきのブース、シャボン玉のブース、ボールハウスなどが並び、ダウン症の子供たちとその家族、地域の小学生やスタッフが一緒に楽しみました。

私はボランティアとしてフェイスペイントを担当しました。ペイントが終わって、鏡を見てはにかむ子供たちの笑顔はこの上なく可愛かったです。イベントの最後には、ダウン症の子供たちひとりひとりに対して、彼らがその年に成し遂げたことを称えて表彰する式がありました。誇らしげに表彰状を受け取る子供たちの表情はとても輝いていました(写真右)。



発達障害への偏見はまだまだ無くなったとは言えないかもしれません。しかし、こういったイベントでの交流の積み重ねがより良い未来に繋がっていくということ再認識させてくれるイベントでした。また、一緒にボランティアチームだった学生は、それぞれ看護学、理学療法、作業療法を専攻している現地学生で、4人で医療チームが作れるね！などと会話もはずみました。彼女たちと良い時間を共有できたことも、ひとつの糧となりました。

今月の報告は以上です。来月からは定期的なボランティアのプロジェクトが本格的に始まり、一段と忙しくなりそうです。今後も体調には気をつけて努めていきたいと思います。季節の変わり目ですので、皆様もどうぞご自愛下さい。

(右図：たこ焼きパーティーより)



※ 本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

作成者：小野真彩

作成日：2015年11月2日

フィンドレーは10月に入って一段と寒くなり、キャンパス内のいくつかの木々達が鮮やかな紅葉を見せたのも束の間、一気に葉っぱが散ってしまいました。しかし秋の実をつけた木々達に集まるたくさんの鳥たちの声がキャンパスに溢れ、彼らに日々元気を貰って過ごしています。10月頭にあった秋休みにはルームメイトの実家に滞在し、彼女とその家族の方々と一緒に素晴らしい時間を過ごしました。今回の報告書では、ハロウィンの行事、そして今月従事したボランティアワークについてお知らせしたいと思います。

【Happy Halloween】

今月はハロウィンの月ということで、街や大学は10月2週目から既にハロウィンモードとなり、数えきれないほどのイベントで盛りだくさんでした。そのうち代表的な2大イベントについてご報告したいと思います。

ハロウィンパレード

10月27日にはハロウィンパレードがありました。これは、毎年フィンドレー市の1000人以上が参加するイベントで、地元の有志を募って開催されるパレードです。車やトラックをダイナミックアレンジしてパレード車を作っている様子は大変見事でした。道路の両脇にはお菓子の袋をもった子供たちがぎっしり並び、パレードの行進メンバーからお菓子を貰っていました。私達日本人学生は仮装して行進メンバーとして参加し、子供達にお菓子を配りました。この日はとても寒かった上に雨も降っていたのですが、それでもなお、大勢の子供たちが懸命にお菓子袋をもって並んでいる様子から、毎年彼らがいかにこのパレードを心待ちにしているのかが見て感じられました。



Trick or Treat!!!

10月29日はフィンドレー市が決めたトリック・オア・トリートの日で、子供達がコスチュームを来て近所の家を周り、“Trick or Treat!(お菓子かいたずらか!)”とお菓子を貰いにくる日でした。私は友人の家に招待してもらい、カボチャをくりぬいて中にろうそくを灯して玄関先に置き、子供達の訪問を一緒に楽しみました。日本ではただ仮装を楽しむハロウィンでしたが、うれしそうにお菓子を袋にいれるコスチューム姿の子供達を後ろで見守るお母さんやお父さんの様子も含め、アメリカの文化のひとつを感じることができ、大変心癒されるハロウィンを過ごすことが出来ました。

【Volunteer works】

今月は、定期的なもの、単発的なものを含め、様々なボランティア活動にも参加しました。そのうち3つの活動についてご報告したいと思います。

Children Mentoring Program

今月から、定期的なボランティアのプロジェクトで毎週木曜日に小学校を訪問し、2年生、3年生の子供達と交流しています（写真）。これは、学生や地元のボランティアが子供達のメンター＝良き指導者、友達となり、学校では習わない様々な要素を通じて心の育成を試みるプロジェクトです。訪問している小学校には、両親が居ない子供たちや、片親に育てられた子供たちも多く通っています。フィンドレー大学からは何人かの留学生が参加しており、私達の役割は、彼らと友達になり、異文化に触れる機会を作ること、そして他国のひとにも寛容な心を育むことです。週に1回の機会を大切に子供達と交流し、少しでも彼らの心が豊かになる助けができるよう、今後も努めていきたいと思っています。



Mobile Food Pantry

アメリカでは、ホームレスの方や低所得層の方々のため、食料の無料配布が普及しています。この配布を行う場所はフードパントリーと呼ばれ、配給される食料は、食品製造会社や小売業者からの商品（包装の傷みや賞味期限の為に売れなくなったもの等）の寄付や一般家庭からの寄付で集められています。



フードパントリーが通常特定の区域に構えられるのに対して、モバイルフードパントリーは、より多くの地域の人に食料を届けようという趣旨で日によって別の場所で食料配布をおこなうパントリーです。10月末はフィンドレー大学に構えられるということで、ボランティアとして配給をサポートしました。用意された食料は様々で、肉類、缶詰を初めとして、サラダやフルーツ、シリアル、牛乳やジュース、お菓子などもありました。

フードバンクは、1960年代にジョン・ヘンゲルというビジネスマンによって始められ、1970年代には様々な都市で彼のシステムを倣っていくつかのフードバンクが設立されたそうです。またその後、税金に関する法律の改正によって、食料を寄付する会社が税金を緩和されるようになったことを契機にこのシステムは急成長を遂げ、80年半ばには多くの大都市がフードバンクをもつようになったそうです。また、ヨーロッパでもこのシステムは取り入れられており、日本では日本に来ていた元海軍の留学生によって2002年に初めて導入されたということも知りました。

長年このボランティアに参加しているスタッフの方は、「低所得者の人にとって助けになるのはもちろん、企業側にとっても、売れない商品を捨てるにはお金がかかるし引き取ってくれる機関があれば助かる。フードバンクに寄付していると優良企業として扱われるようにもなっている。」と話されていました。こうしたボランティアや慈善活動が効果的に働き、なお長く継続的に続くためには、する側とされる側、双方に何らかの良い影響が齎されることがやはり大切で、国の政策によってもその継続性は左右されるのだということを感じました。

アメリカ国内で貧富の差があるのはもちろん、世界的にみればその差はより顕著です。「余っているものを、それが必要とされている場所に」という理論はとてもシンプルですが、どこにその発想を活かすのか、そしてそれをどう実行するのかによって、様々な問題に大きな変化を齎します。ジョン・ヘンゲルという一人のビジネスマンの発想から、今では国を超えてフードパントリーの取り組みが広がりつつあるように、私も将来は医師として、人の為になる何かを発想できるよう日々アンテナを張って過ごしていきたいと切に感じます。

Halloween Dance

先月 Buddy Walk に参加したものと同じクラブ（STRIDE）の活動で、今月は Halloween dance というイベントにボランティアとして参加しました。このイベントでは、クラブ会場を貸し切って、自閉症を始めとした発達障害を持つ子供たちと一緒に Halloween の衣装で DJ の音楽にあわせておどりました。クラブというと若者の遊び場のイメージで、会場として使うことに初めは驚きました。しかし、ボランティアの学生や幾人かの子供たちが楽しそうに踊る雰囲気につられてか、初めはあまり動きを見せなかった子供たちも最後にはジャンプしたりハイタッチをしたりして一緒に踊って



いました。発達障害があるから特別なケアが必要、こういう場所には向かない、といった姿勢ではなく、皆と同じことを、同じように体験する機会を作るという姿勢が、子供達の健やかな成長を促しているひとつの形を感じることができ、また子供達と楽しい時間を共有できてとても幸せに思いました。

今月の報告は以上です。授業ではどのクラスも学期末に向けての大きな課題がスタートしつつありますが、人と人との繋がりを大切に、今後も上手く両立を図って過ごしていきたいと思います。

※ 本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

作成者：小野真彩

作成日：2015年12月5日

いよいよ今学期も終わりに差し掛かって参りました。11月は雪がちらついていた日があったものの、今年は暖冬だそうで氷点下を下回った日はほんの2、3日でした。寒さが苦手な私としては、このまま暖冬が続いてくれることを願うばかりです。今月の報告書では、授業の内容や福井レセプション、サンクスギビングデー、今月訪れた場所などについてお知らせしたいと思います。

【授業について】

9月の報告書で日本とアメリカの文化のクラスについて少しお知らせさせていただいたので、今回は今学期履修したそれ以外の5つの授業について書いていきたいと思います。

College and Professional Reading この授業は今年から必修になったリーディングの授業で、クラスで1つの小説を週ごとに読み進め、本の内容について15人程のクラスメートと考察やディスカッションをしました。今学期の本は“Orphan Train”というアメリカで1970年代に存在した孤児列車の実話を基にした小説で、アメリカのたどってきた歴史の一部を垣間みることができ大変興味深かったです。

Writing Review for Non-Native Speakers この授業は例年の留学生に必修のライティングのクラスで、論文の引用の仕方や、論文の分析の仕方、英語の文章の正しい構成などについて学びました。また中間プロジェクトとしてCulture Shockに関してのリサーチにも取り組み、サウジアラビア、モンゴル、ヨルダン、パキスタン、中国、台湾からの友人にインタビューをしてパワーポイントにまとめました。インタビューは大変面白く、多くの文化の違いについて学ぶことができました。

General Psychology これは心理学の基礎の概念を学ぶ授業で、人格形成や発達、脳の働き、身体的リズムが心にもたらす影響、文化による行動の違い、精神疾患とその治療法など、心理学が取り扱っている多くの分野について幅広く学びました。心理学は一般的にポピュラーであるがゆえに、メディアなどによって誤った情報が取り上げられることも多いように思います。しかし、この授業で扱った教科書には、ある提唱が、いつ、どこで、誰によって、どのような実験・研究で確立されたのかなどが大変細かく記載されていて、根拠に基づいて正しく学ぶことができました。また、現代社会における事例と重ね合わせた記事や、現在の心理学が抱えている問題点についての記載もあり、将来医師として病気に伴う心理的な問題を扱う上でも有意義な授業でした。

Creative Dramatics クリエイティブ・ドラマティクスとは、演劇創作の過程に主眼を置き、自らの経験や絵本などを素材に物語を創作、それらを即興的に身体や言葉で表現したりする技法です。主に幼稚園や小学校において子供の創造性を育てること、また大人の心理的治療にも役立てられて

いるそうです。この授業では、実際に絵本などを用いて創作活動を行うことで、クリエイティブ・ドラマティクスの技法や概念について学びました(写真:パペットプロジェクト)。クラスメートは教育学部のアメリカ人学生が多く、また授業のほとんどが共同活動だったので初めは英語でのコミュニケーションに戸惑うこともありましたが、創作活動を通じてお互いの個性がマッチしあい、今では一番仲の良いクラスになりました。今学期でこのクラスが終わってしまうのが本当に寂しいです。



Introduction to Applied Music (Voice) 私は音楽や歌が好きなので、授業の一環で週に一回のボイスレッスンの授業も履修しました。このレッスンでは先生からマンツーマンで歌を教わります。11月にはリサイタルも行われ、公的なホールで歌を披露しました。練習曲はもちろん英語の曲だったので、多くのネイティブのお客さんを前に一人で歌うことにはプレッシャーを感じましたが、ひとつひとつの英語の歌詞や音を大切に歌うことができ、とても良い経験でした。

【福井レセプション】

11月11日に福井レセプションという集まりが開かれました(写真)。福井県出身で日系企業(フクビ化学工業・セーレン株式会社)をアメリカで経営していられっしゃる方々や、フィンドレーのミハリック市長とその旦那様、フィンドレー大学のフェル学長とその旦那様、そして、フリード元学長など多くの方がいらっしゃいました。帰国以前より、このフィンドレー大学・福井県奨学金制度が戦後のフリード元学長と当時の福井県の人々との出会いをきっかけに創設されたというお話を聞いておりましたので、私はフリード元学長と会えるのを心待ちにしていました。このレセプションでついにお会いすることができ、自己紹介とお礼の言葉を伝えることができとても嬉しかったです。あまり長くはない時間でしたが、夕食を食べながらフェル学長、市長さんとも会話を楽しみ、福井県出身の方々との会話では久々に聞く福井弁に癒され、皆さんと良い時間を共有することができたように思います。フリード元学長が福井県の人々との繋がりを守ってきたように、私もフィンドレーで出会う人々との繋がりを日々大切に、親善大使としての役割をしっかりと努めていきたいという想いを改めて再認識いたしました。



【Thanks Giving Holiday】

11月27日の木曜日には、アメリカの祝日であるサンクスギビングデーがありました。この祝日は、たくさんの親戚が集まって食事をしながら収穫の恵みに感謝する日でアメリカの家庭においては日本におけるお正月のような大事な家族行事のひとつだそうです。私は日本語学科のアメリカ人の友達の家に招待してもらい、この祝日を一緒に過ごしました（写真）。昼には毎年この日にニューヨークで開催される大きなバルーンのお祭り“Macy's Thanksgiving Day Parade”をテレビの生中継で見て、その後少し早い夕飯を親戚の皆さんと一緒に食べ、皆で一眠りして、クリスマスの飾り付けをしました。サンクスギビングの定番料理には七面鳥やスイートポテト、クランベリーソース、パンプキンパイ、スタッフィング(パン、野菜、ハーブを和えたもの)、インゲンの煮物などがあり、私はクランベリーソースを友達と一緒に作りました。食事に感謝すると共に、まるで家族の一員のように迎え入れてくれた友達とその親戚の方々の暖かさに感謝の気持ちでいっぱいの祝日でした。



【美術館・博物館巡り】

また、11月は週末や休暇を利用してフィンドレー市外の場所にもたくさん出掛けました。初旬にはニューヨークへのArt Trip Programに参加し、メトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館、音楽バーなどを訪れました。主に芸術専攻の学生と一緒に参加しており、このツアーを通してまた友達が増えました。中旬には日本からの留学生とデトロイトにあるヘンリー・フォード博物館と、トーマス・エジソン生誕の地であり今は野外ミュージアムとなっているグリーン・フィールドビレッジを訪問しました。また下旬の連休には、中国と台湾からの留学生友達とシカゴを訪れ、代表的な観光地やフィールド自然史博物館、シカゴ美術館などを巡り、大変充実した日々でした。

日本では医学の勉強や部活、アルバイトなどに忙殺されがちだった私にとって、ゆっくりと芸術にひたり、その歴史的背景や文化的背景に思いをめぐらせることができることはとても貴重です。また、その時々を一緒に過ごす多様な友達との時間は本当に楽しく、日々出会いに感謝しています。



今月の報告は以上です。今学期は残すところ期末試験のみで、12月10日から1月3日までは冬期休暇となります。これまでのところどのクラスでも順調に勉学を進められているので、冬休みに向けて残りの一週間も頑張って参りたいと思います。

(左図:シカゴ美術館にて)

※ 本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

作成者：小野真彩

作成日：2016年1月5日

皆様、新年明けましておめでとうございます。約三週間の冬休みが終わり、先日春学期がスタートいたしました。留学生活もいよいよ後半戦です。今月の報告書では、老人ホームでの地域活動、冬休み期間中の国内旅行、そしてカナダでの2週間の出来事についてお知らせしたいと思います。

【老人ホームにて～音楽演奏&茶道紹介～】

フィンドレーに來ている日本人留学生には、埼玉から同じく親善大使として來ている學生がいます。その友人(徳永さん)と一緒に、お互い親善大使としてフィンドレーで地域貢献できないかということを学期初めより考えて参りました。そして思いついたのが、地域での音楽演奏と茶道紹介です。12月初旬に私達はフィンドレー市にある2つの老人ホームの訪問をしました。

音楽演奏では、私が歌とギター、徳永さんがクラリネットを担当し、クリスマスソングや、アメリカの名曲、日本の名曲など様々な曲を演奏しました(写真左)。老人ホームを訪問するのは初めてで準備をしながら不安に思うこともありましたが、クリスマスソングにあわせて一緒に歌ってくださったお年寄りの方や、足や手でリズムをとって楽しんでいる方もいて企画は大成功でした。演奏の後には、その老人ホームに住んでいる多くの方と会話を楽しみ、「素晴らしい演奏ありがとう、または是非戻ってきてね」との言葉も頂いて心が満たされる気持ちがしました。

私、徳永さん共に、日本で茶道を習っていたということで、もう一軒の老人ホームではお抹茶を点て、皆さんに試飲して貰いました(写真右)。何人かの方にとってお抹茶は少し苦かったようで砂糖を足して飲んでいた方もいましたが、皆さんとても気に入ってくださった様子でした。試飲会の後には、茶道で使う道具の閲覧会をしました(写真中)。竹でつくられた繊細な茶筌や茶杓、多様な模様の茶碗、漆塗りの絵が書かれた棗(なつめ)など、日本の芸術の詰まった道具はとても魅力的だったようで、多くの方が笑顔を浮かべながら手にとって見ていらっしゃいました。日本の芸術には、人を感動させるだけでなく、人の心を癒すパワーのようなものがあるように感じました。

今学期はこの活動を大学のイベントや中学校、他の老人ホームにも広げていく予定です。



【アメリカ東海岸～Couch surfing～】

カウチサーフィンというネットワークを皆様ご存知でしょうか？これは、現在世界で最も大きなホスピタリティー・エクスチェンジ・ネットワークと呼ばれているもので、海外旅行などをする人々

がお互いの自宅を宿として無料で提供しあうウェブサイトです。冬休みの期間に、このネットワークを利用してアメリカ東海岸の3つの都市で宿泊を依頼し、4軒のお家にステイさせてもらいながら旅行をしました。訪れた都市はワシントン D.C. ボルチモア、フィラデルフィアです。

ホストの方々とお話を通じて、彼らが住んでいる土地の様々な側面を知ることができました。また、カウチサーフィンを利用している人には、旅好きの人や、異文化交流が好きな人が多く、日本の文化に深く興味を持っている方もいました。お互いの国の話や、訪れた国々でのお互いの体験談を楽しみ、私はそれぞれの家庭で茶道やおりがみなどを披露しました。ただ代表的な観光地を訪れるだけでなく、その土地に住む人と同じ屋根の下で語り合うことには大きな価値があると思います。この旅で出来た人との繋がりを、今後も大切にしていきたいです。

【カナダ～ホームステイ・病院見学～】

東海岸の3都市を訪問した後、カナダのオタワ、トロントにそれぞれ一週間滞在しました。

オタワでは、3年前にホームステイさせて貰った家庭を再び訪ねて滞在し、クリスマスと一緒に過ごしました。日本は少し異なり、カナダとアメリカではクリスマスが家族にとって一年で一番大切な行事と呼ばれるほど大きな役割を担っています。クリスマスツリーの下にはたくさんのプレゼントが置かれており、12月24日の夜にみんなで大開封をしました。こちらでは、子供達へのプレゼントだけでなく、家族や親戚がお互いに交換し合うのが慣習だそうです。夜にはフランス式のクリスマスの伝統料理を皆で食べ、家族のあたたかさにこころがほっこりしました。

また、この滞在で一番驚いたのは、自分の英語力が3年前とは格段に変わっていることを実感したことです。以前は、ところどころ聞き取れるものの、話すとなるとなかなか言葉が出てこない状態でした。しかし今回、会話はほとんど聞き取って理解することができ、自分の伝えたいことを的確に伝えられ、以前よりはるかに多様な話題について話すことができました。何より嬉しかったのは、そういった会話を通じて、ホストファミリーの一人一人との関係を深められたことです。福井県の奨学生としてこの留学のチャンスを与えていただけたおかげで、この家族との再会の機会を得ることができ、また英語力を延ばせる最高の環境にすることができたこと、改めて感謝致します。



オタワに一週間滞在した後、トロントに住む知人の家にお邪魔しました。トロントには、心臓分野の医療で有名なトロント総合病院、そして世界的に有名な小児病院のひとつである Sick Kids Hospital があります。滞在期間中に、それら二つの病院見学に行ってきました。

トロント総合病院では、心臓カテーテルのラボに配属され、手術の様子や、救急部から運ばれてきた患者さんの処置などを見学しました。ラボには、ニュージーランドからフェローシップ(研修医を経た若手医師がさらなる専門性を磨き研修すること)で勤務している男性医師の方がいました。彼はとても気さくでフレンドリーな人柄で一見あまり威厳がないように見えたが、手術室に入ると彼の顔つきはがらりと代わり、迅速に、そして確実に手術をこなす様子はまさにプロフェッショナルでした。黙って見学をしていた私に、彼は、“Don’t be quiet. You have a lot of time to learn here.”と声をかけてくれました。私はその言葉の中に、今まで彼がいかに貪欲に医学を学び、経験を重ねてきたのかを垣間見たような気がしました。彼のプロフェッショナルとしての姿勢に感銘を受けると共に、私もこのような医師になりたい、どのような状況でも怖じ気づかず、貪欲に学ぼうと決心致しました。



二つ目に感銘を受けたのは、**Sick Kids Hospital** の病院システムです。この病院の中には、病気をもつ子供達、そしてその家族をサポートするあらゆる工夫がこらされた施設が備え付けられています。まず、長い入院生活を強いられた子供達が学校で遅れをとらないように学べるクラスがあり、そのための先生が雇用されています。病院の売店では、治療の関係で食物に気をつけなければならない子供達向けへの特別な食べ物がそろえられたショップがあり、全てのスタッフが管理栄養士、売り上げの100%が小児医療の研究のために使われるとのことでした。また、各フロアーは子供達の居心地の良いように壁紙や展示物などがアレンジされており、まるでどこかのテーマパークのホテルであるかのような作りになっていました(写真)。その他、この病院には1500人にのぼる地域からのボランティアが活動しています。病気や怪我でたくさんの検査を受けなければならない子供たちに、検査や採血を通過するごとにビーズが増えていくネックレスを作ったり、診察待ちの子供たちとお話をしたり、絵本の読み聞かせをするなど、多種多様な役割を担っているそうです。さらに、この病院は国からの予算の他にファンドレイジングによる大きな経済的支持があって発展してきたということも知りました。『どのような物事にも、やり方は100万通りある一。』これは私のメンターの一人の言葉ですが、この病院見学を経て、その言葉の如く、患者さんとその家族をどんな形でサポートするかに枠組みなどというものはないのだと感じました。

冬休みの3週間で、たくさんの人と再会し、また新しく出会い、英語を学業として“学ぶ”のではなく、人と人とを繋ぐコミュニケーションのツールとして存分に“使う”ことができたことは大きな収穫でした。国際語としての英語を身につけることで、いかにより多くの人との対話を持つことができ、いかに日本語だけでは学べない広い世界を知ることができるかということを改めて痛感し、今後もより一層精進したいという想いを強く感じました。

【おわりに】

秋学期の授業では、6つのクラス全てにおいて最高評価のAを頂くことができました。福井県からの奨学生として恥じぬように努め、ひとつひとつの授業を丁寧にこなすことができたこと、そして友人やルームメイトからの支えのおかげでこのような成績を修めることができたと感じています。福井県の皆様、家族、友人を初めとし、私を支えてくださっている全ての方の健康と幸福を祈願して新年の留学生生活をスタートしていきたいと思います。今年もどうぞよろしくお願い致します。



※ 本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

2015-2016 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 1月

作成者：小野真彩

作成日：2016年2月4日

春学期が始まって一ヶ月が経ちました。フィンドレー大学で過ごせる時間の3分の2がもう終わってしまったと思うととても寂しく、こちらでの生活一瞬一瞬が日々貴重に感じられます。自分の心によく耳を傾け、残された時間の中でチャレンジしたいこと、大切にしたいことをしっかり見極めて過ごしていきたいです。今月の報告書では、新しく始まった授業について、そして今学期参加しているミュージカルのプログラムについてお知らせします。

【授業について】

今学期は、秋学期に履修していたライティングの授業、そしてボイスレッスンの継続に加えて、以下の5つのクラスで学んでいます。どのクラスも大変面白く、毎回の授業を楽しみに通学しています。

Introduction to Religion このクラスは、宗教についてアカデミックな視点から学ぶ授業です。日本ではあまり宗教という概念に馴染みがありませんでしたが、アメリカでの留学生活の中で様々な国からの友達が出来るとして多様な宗教に触れる機会を持ち、また教会でのボランティア、美術館で鑑賞した多くのアートに宗教的な側面が見られたこと、ホロコースト美術館で宗教的迫害の歴史を目の当たりにしたことなどから、ひとの心、文化、歴史、芸術などが宗教的な観念に深く根付いていることを実感し、この機会に学ぶことにしました。現在は宗教という概念そのものについて学んでいて、今後は世界の代表的な宗教の成り立ちやその哲学について学んでいく予定です。

Cultural Anthropology このクラスでは、文化人類学について学んでいます。世界各国の文化のケーススタディーをもとに、文化が人の行動や考え方の形成にどのように働いているか、他者の文化をどのように調査するか、また調査結果を社会的問題解決のためにどのように応用するかなどを学んでいます。医学を学ぶ際には主に人を生物学的な視点から捉えますが、文化人類学では文化的、社会的側面から人への理解を深めます。将来医師として実際に患者さんと接する際には、双方の視点を取り入れ、病気だけでなく患者さんの文化的背景や生活にも目を向けることがより全人的な医療に繋がると考えているので、これからも貪欲に学んでいきたいです。

Introduction of Gender Studies アメリカでは、昨年6月に全米で同性結婚が認められたこともあって、ますますジェンダーの多様性への社会的関心が高まっています。フィンドレー大学にもLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーを示す言葉）への理解を深めることを目的とした学生団体があり、LGBTの学生を含め多くの学生が和気あいあいと学んでいます。また、日本より多くの方がレズビアンカップルであることやバイセクシャルであることにオープンであり、ジェンダーの捉え方の違いに大きな関心を持ったことをきっかけに聴講しています。

授業では世界各国の社会における男女の役割の移り変わりやジェンダー形成について、歴史学、生物学、心理学、宗教学、文化人類学、また社会学などの視点を取り入れながらディスカッションを通じて学んでおり、これまで学んできたことや現在他のクラスで学んでいることが応用されて大変興味深いです。

Principle of Speech この授業では、パブリック・スピーチについて基礎から学んでいます。定期的に異なる種類のスピーチを扱うプレゼンの発表が課されており、それぞれのスピーチに向けて、トピックの選び方からアウトラインの組み立て方、聴衆の分析、話し方、伝え方について学んでいます。私以外は皆ネイティブの学生なので発表の際は少しプレッシャーに感じますが、一回一回入念に準備をして臨むことで、聞き手に何かを伝えることができた、自分のスピーチを楽しんでもらえたという実感が持てた時にはとても嬉しく感じます。4月には学内のシンポジウムで日本の医療についてプレゼンをする予定なので、これを一つの大きな目標として“伝える力”をさらに磨いていきたいと考えています。

Self-Defense and Stress Management

この授業は **Criminal Justice** (犯罪学) のコースの一部で、護身術について韓国の特コンドーの技をもとに学んでいます(写真)。**Criminal Justice** を専攻している学生に加え、多くの女子学生がこのクラスを受講しています。父が少林寺拳法を嗜んでいたのが少し馴染みはあったのですが、実際に武芸をやるのは初めてでとても新鮮です。また、授業で学べる護身術はとても実践的なもので、いざというときに自分の身を守る術を楽しみながら着実に身につけていきたいです。



【ミュージカル～SMILE～】

秋学期にボイスレッスンや **Creative Dramatics** の授業を履修していたことをきっかけに、学内で毎年春学期に行われているというミュージカルのプログラムのお知らせが12月に届きました。このミュージカルは、フィンドレー大学の演劇学の教授、音楽の教授と、ダンスの講師の先生の共同指導を受けて作り上げるもので、キャストとして参加するにはオーディションを通過することが必要とされています。歌はもちろん、中学校まで新体操を習っていたこともあって踊ることが好きだった私はこのプログラムに大きな魅力を感じ、思い切ってオーディションを受けてみたところ、何とキャストとして参加できることになりました。キャストのメンバーは、演劇専攻からその他様々な学部学科からの学生、大学の教授の先生方など総勢約30人で、1月初めから放課後や土日を用いて練習を重ねています(写真)。題材は“SMILE”というミュージカルで、1975年の同名の映画をもとにして1986年から1987年にブロードウェイで公演されていた作品です。



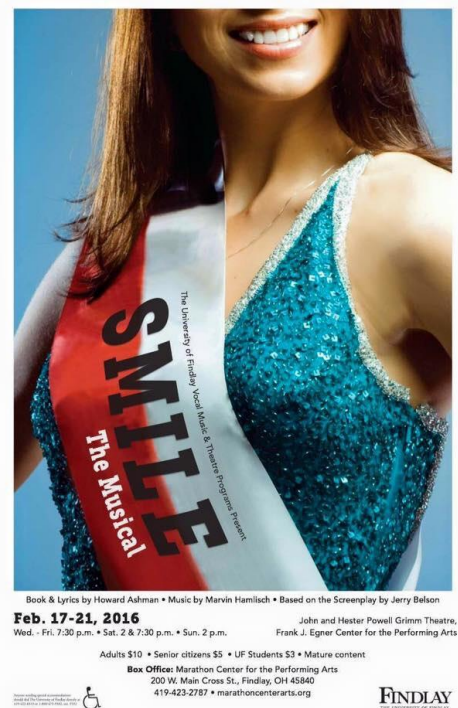
この作品は、公式的な音源や撮影記録が残されておらず、練習はたった一冊の脚本と歌の楽譜だけではじまりました。初めはこのミュージカルがどんなストーリーなのかさえ分かりませんでしたが、練習を重ねて時間が経つにつれ、歌のメロディーや歌詞と脚本が混ざりあい、また舞台セットがどんどん組み立てられて、ミュージカルの世界がみるみる出来上がってきました。作品が輪郭を増していく様子は、まるで一つの木の種が芽を出し、枝を延ばし、葉をつけて花を咲かせていくようでとてもわくわくします。また、キャストとして一緒に参加しているメンバーとも徐々に絆が深まってきて、ひとつのものを皆で作りに上げるという作業は本当に素晴らしいと痛感しています。これからは、劇中の音楽を演奏するオーケストラも一緒に練習に参加する予定でとても楽しみです。2月17日から2月21日までの期間に6回の公演があり、友達やお世話になっている先生方、地域のコミュニティの方々も見に来て下さる予定で、練習にもますます精が出ます。

今学期は、秋学期より多く授業を受けることを決め、ほぼ毎日あるミュージカルの練習のこともあって時間のマネジメントが上手くできるか少し懸念していましたが、これまでのところ順調に充実した日々を過ごせています。どうやら、英語力が総合的に伸びてテキストの予習や復習、課題などが秋学期よりも早くこなせるようになったようです。残り3ヶ月間も、自分の出来る最大限のことを吸収して悔いなく帰国できるよう、継続して精進して参りたいと思います。

(右図：ミュージカルのパンフレットより)

※本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。

onom@findlay.edu



2015-2016 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 2月

作成日：2016年3月6日 作成者：小野真彩

フィンドレーでの生活もついに残り2ヶ月を切りました。凍えるほどの寒さで雪がどっと降ったかと思いきや、週末は15度にもものぼる小春日和が垣間みられるなどまだまだ不安的な気候が続いていますが、これから少しずつ暖かい春に向かっていく匂いを感じられます。今月は、フィンドレーの市中病院でのインタビュー、小学校でのインターナショナルナイト、日本からの友人との再会、そしてミュージカルの公演についてお知らせしたいと思います。

【Blanchard Valley Health Center 理事長との面会】



Blanchard Valley Health Centerは、フィンドレーの病院ネットワークを築いている医療施設です。いつも日本人留学生の面倒を見てくださっている川村先生がご配慮くださり、このセンターの理事長のスcottさんと会ってお話する機会を頂くことができました(写真)。理事長と聞いて私はとても厳格な様子を想像していたのですが、実際に会ってみるとスコットさんはとても朗らかで気さくな方でした。印象に残っているのはやはり日本とアメリカの病院の違いです。まず、日本では病院の理事長はだいたい医師で、医療者兼経営者として務めていらっしゃる方が多いのですが、スコットさんはビジネスや経営を専攻として学んでいた人でした。日本とアメリカでは医療システムが違い、病院経営も自由市場となっているので病院経営に経済的専門性は欠かせないということでした。また、病室に関しても、入院用の部屋はすべて個室となっており、患者さんの意向に合わせてリフォームしたばかりで、今後も患者さんの意見を取り入れながらより改善していく予定だとおっしゃっていました。例えば、看護師さんと患者さんがうまくコミュニケーションをとれるように問診台とベッドの配置が工夫されていたり、患者さんの立場から部屋の景観が損なわれないように、医療器具のコードなどが壁の薄いクローゼットにしまいこまれるようになっていたり、ホテルの部屋のように綺麗に整えられていました。日本の病院では経費を回すのがなかなか難しい部分も、こちらでは寄付を募ったり、ビジネスとして成功させることで融通が効き、患者さんへの医療向上に繋がるのだとおっしゃっていました。また、この病院でボランティアをされている方は、特に定年退職された年配の方が多くということも聞きました。日本では比較的若い方がボランティアをされているイメージがあるのですが、年配の方がボランティアに参加することは生き甲斐を見つけより健康に長生きできるという点でも大変意義のあることだと感じ、日本でもこのような仕組みがもっと広がるよう何か努めたいと思いました。

さらに驚いたのが、私達との面会のあとの別れ際に、スコット理事長がこれから患者さんのところを挨拶して回るんだとおしゃっていたことです。医師ではなくとも、彼がいかに経営者として、病院のことだけでなく、病院にこられる患者さんのことを考えていらっしゃるのかということが垣間みられ大変暖かい気持ちになりました。

【インターナショナルナイト】

2月25日には、フィンドレーの地元の小学校でインターナショナルナイトというものが行われました。そこで、各国からの留学生がパフォーマンスする時間があり、私と埼玉県奨学生の徳永さんで演奏をしにいき、涙そうそうを披露しました。体育館にたくさんの国のブースが設置されており、多くの人が訪れ、それぞれの国のゲームを楽しんだりその国の代表的な料理を食べて楽しんだりしていました。幼少期にはどんなことも楽しむことから始まると思うので、こうして小学生の時から異文化に触れることができるのは子供達にとって大変貴重な機会であると感じました。こういった場所から他国の人や異文化への理解が生まれ、一進一退を繰り返しながらも、少しずつ、人種に関わらず多様な人々が理解し合える世界に近づいていっているのではないかと思います。



【日本からの友人との再会】

2月は友人との嬉しい再会もありました。初旬には、福井大学の医学部の同期の友達が春休みを使ってオハイオまで来てくれました。来年から福井大学に長期留学予定の日本語学科の友人を誘い、コロンバスでご飯を食べたりウィンドーショッピングをしたりして楽しみました。また何よりも、日本からアメリカまではるばるの会にに来てくれる友人を持ったことをとても幸せに思いました。

2月の末には、夏に3週間のプログラムでフィンドレー大学に留学に来ていた加計学園の友人が2人大学に遊びにきました。彼らとは、Welcome back パーティーを開いて楽しみ、またクリーブランドまでNBAのバスケットボールの試合を一緒に観戦しに行きました。今月は、北海道の酪農学院大学から3人の獣医学部の学生が来ていて、彼らと話をするのもとても楽しいです。留学生活において、もちろんアメリカ人の友達や他の国からの友達を作ることは大切ですが、こうして留学にきたからこそ出会えた日本人の留学生との繋がりもとても貴重なものだとは感じます

【MUSICAL:SMILE 公演！】

最後にミュージカルの公演についてご報告させていただきたいと思います。約2ヶ月に渡る練習を経て、2月17日から21日の5日間、私が参加していたミュージカルの公演がありました。全

部で6回公演があったのですが、チケットはほぼ全日程売り切れ状態で、本当にたくさんの方々が見に来てくれました。



今回演じたSMILEというミュージカルは、日本でいうミスコンテストを舞台にしており、Young American Missを競う大会を巡って各キャラクターのバックグラウンドが物語を織り成していて、私は15人いるコンテストのうちの一人でした。練習の際には、役の大きさに関わらずキャストは皆それぞれの役のバックグラウンドストーリーを考えて発表しました。どこで生まれて、どんな家族がいて、今までどんな人生を歩んできてそのコンテストに来たのかということをお話し、よりそのキャラクターに成り切るためです。演技をしながら全てのダンスや歌をこなし、また10回以上の早着替えを間に挟んで役に入り込むのは苦難の技で、役者として舞台上と舞台裏での切り替えが演じる上でいかに大切でいかに難しいかということを感じました。

その他にも様々な発見がありました。実は私はこのミュージカルを始めた当初、キャストのメンバーと馴染むのに少し抵抗がありました。大きな理由は、留学生が私ひとりだったことです。また、今まで関わってきたアメリカ人の友達は、もともと異文化や国際交流に興味がある人や日本語を専攻している友達が多く彼らと仲良くなるのは難しいことではありましたが、今回はそうではありませんでした。プライドを持って歌やダンスをこなす他の学生を見て、彼女たちは日本人に対してどのような考え方を持っているのだろうか、ネイティブではない人間がショーにいることを良く思わないひともし居るのではないかなど考え、不安に思うこともありました。しかし、足を引っ張るわけにはいかないという気持ち、歌とダンスへの想いを強く持ち台詞の発音や歌の暗記を懸命に努め、分からないことがある時には助けを求めて前に進んでいくうちに、多くのひとが“Hi Maaya! How are you doing?”と声をかけてくれるようになりました。また、何かできることがあればいつでも言ってね、などと声をかけてくれる人も増えていきました。特に私が嬉しく感じたのは名前を呼んで挨拶してもらえることです。ただの一キャストとしてではなく、一個人である私として認識してもらえたことが大変心強く安心することだったのだと思います。ほんの小さなことかもしれませんが、将来医師として患者さんと接する際にも、ひとりひとりの名前を大切にしたいと感じました。

沢知恵さんという歌手が書いた歌の中に、”The line”

という曲があります。どんな物事にも線はそこに存在しているのではなく、自分が引いているものであり超えられるものなのだとことを書いた歌です。沢知恵さんは、戦後初めて韓国に留学した日本人の父親と



韓国人の母親の間に生まれ、政情不安定な最中、幼い頃から日本、韓国、アメリカを中心に移り住んで育った女性歌手です。それぞれの国で音楽活動を重ね、1998年には日本国籍を持つ歌手として戦後韓国で初めて韓国政府の許可を得て初めて公式に日本語で歌い、同年第40回日本レコード大賞アジア音楽賞受賞されました。私はこのミュージカルを通して、私と他のキャストのメンバーとの間に線をひいていたのは自分自身だったということに気がつきました。調子はどうか？といつも聞いてくれたダイアナ。貴方の歌とダンスは本当に素敵だよ、と声をかけてくれたシェリー。毎日笑顔で挨拶してくれたブレント。困ったときにいつも助けてくれたセラ。毎公演前に全キャストに“Break your leg!”という言葉をかけて皆を元気づけていたドノバン。たくさんの優しさと思いやりを支えられて、私が自分で引いていた線はどんどん解けていきました。ネイティブであろうとなかろうと、私と他のキャストとの間にもともと線はなかったということ、少し考え方を変え、勇気を出して足を踏み出せば、すぐそこに違った世界が見えてくるのだということを感じました。（“The line”の歌詞を最終ページに載せましたので、よろしければご一読ください。）

また、お世話になっている先生やたくさんの友達にも見に来てもらうことが出来ました。彼らから、感動した、とても良かった、夢のような時間でまだ興奮が覚めやらない、などコメントを頂き、またお客さんからスタンディングオベーションが貰えたときは目が涙でいっぱいになりました。このミュージカルに出演して素敵なキャストとひとつのエンターテイメントを作れたこと、お客さんに、日常から少し離れてミュージカルの世界に浸ってもらえたことをとても嬉しく思いました。また、私が多くの時間をかけて練習に励んでいたことを知っていた友達は、私が舞台上で楽しそうに踊っているのを見て涙がでたと言ってくれました。留学に来て、こんなにたくさんの暖かい人に出逢えて、今を過ごせることを改めて幸せに感じた瞬間でした。

公演を終えて時間に余裕ができたのは嬉しくもありますが、これまでの期間、空気を吸うようにほぼ毎日放課後にキャストと顔を合わせ、歌やダンス、通し練習を重ねてきたのがもうなくなって



しまうと思うと大変寂しくもあります。このミュージカルを通じて出来た繋がりを、残り2ヶ月、そしてその後も大切にしていきたいと思います。

※本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

～The line～by Tomoe Sawa

Where's the line between love and hate
Where's the line between north and south
Where's the line between man and woman
Where's the line between you and me

There's a line, invisible line
Everywhere in this world
Everyday of our lives
And it's you, to go over the line
It's easy if you try
'Cause the line is you

Where's the line between war and peace
Where's the line between adult and child
Where's the line between black and white
Where's the line between life and death

The line is me, the line is you
There is no line, no line anymore
There is no line

2015-2016 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 3月

作成日：2016年4月6日 作成者：小野真彩

とうとう留学最終月、4月が来てしまいました。日本では新年度が始まって、いろんな場所で新しいことが少しずつ動きだしている頃かと思います。近日のニュース記事では東北医科歯科大学に今年新設された医学部の一期生の入学式の様子が垣間見られ、医師不足の現状にも新たな風を感じました。日本にいる家族や友人からはお花見を楽しんでいる写真が届き、こちらでは学期末とあって慌ただしく毎日が過ぎる中で日本の桜が恋しく感じられます。今月の報告書では、春休みのボストン訪問、クリーブランド・クリニック訪問、ホースセラピーのボランティア、その他課外活動等についてお知らせ致します。

【ボストン訪問】

3月頭の春休みを利用して、ボストンを訪問しました。一番の目的は、現在ハーバード公衆衛大学院で勉強なさっている後藤先生を訪ねることでした。後藤先生は、8年前に福井大学の医学部を卒業された遠い先輩で、以前は福井大学附属病院の救急部に勤務なさっていました。滞在中には、先生や先生の友人と夕飯を楽しんだ他、ご厚意に与り大学院を案内していただきました。

公衆衛生という分野

病気を“治療”することに並び、病気を“予防”することへの関心から公衆衛生に興味があった私は、この度の訪問を大変心待ちにしていました。臨床医学が個人レベルで健康を扱い治療するのに対して、公衆衛生は社会レベルで健康を扱い、集団的な予防に重点を置きます。例えば、「どうやって多くの人を巻き込んで地域全体の健康を改善していくか」、「行政と協力してどのように人々の健康を保持するか」といった命題の追求です。日本の医療界ではまだ公衆衛生という分野があまり確立しておらずそれを学べる学校も少ないですが、アメリカでは、臨床、研究に並ぶ一つの大きな領域として確立されており、医学教育も充実しています。日本でも、予防医学や地域レベルでの健康増進が注目されているいま、公衆衛生の需要は今後より大きくなっていくのではないかと考えます。

後藤先生に紹介していただいた大学院の授業のレジュメには、病院の原因になりうる生活習慣やその他の環境要因とその病気との関連性をデータから正しく分析するための法則や数式が並んでいて、公衆衛生学の奥深さを思い知りました。また、後藤先生と共に同大学院で学ばれている日本人の他の先生方からは、病気に繋がりうる生活習慣に対する行動科学や、健康に関する哲学や心理学を学んでいらっしゃるというお話を聞きました。臨床の現場における治療という枠とはまた別の世界で、医学的観点とその他の切り口を掛け合わせて人々の健康・病気の予防を追求されていることに大きな魅力を感じました。さらに別の繋がりでお会いしたマサチューセッツ工科大学で学ばれている國尾さんという方は、心臓カテーテルの映像分析のアルゴリズム（映像から患者さんの状態を導き出すための手順を定式化すること）を研究されていて、自ら新たなアプローチを発明・追求できる研究という分野にも魅力を感じました。今後、自分も幅広い視野を持って自分が将来医師として出来ることを見定めていきたいと思っています。

ボストン小児病院 滞在中には、2015-2016年の全米小児病院ランキング一位を獲得したボストン小児病院も尋ねました。冬休みにトロントの小児病院にいった時にも気がついた事と同様に、やはり感銘を受けたのは病院のデザインの自由度です。病院のロビーには大きなプロジェクターが設置されており、子供達の動きに合わせて星が動いたり、花火が上がったりと、子供たちが少しでも楽しく過ごせるように工夫がなされていました。また、病院の渡り廊下には様々なアートが展示され、まるで美術館のようになっていたことも印象的でした。さらにこの病院でユニークだと感じたのは、病院の中にラジオ局が設置されていたことです。このラジオ局には本物のラジオ局と全く同じ設備が整えられており、患者さんからのリクエストを受け付けて病院内でその曲を流したり、入院している子供たちにインタビューを行ったり、子供達が自らラジオ曲のレポーターを体験できたりと、様々な用途で使われていました。またそのラジオ局を主に運営しているのは地元の大学生のボランティアで、私が訪問した時には近くの大学で **Public Relation** を学んでいる学生がインターンとして駐在していました。毎年更新される全米病院ランキングがモチベーションの底上げの一部にもなっているのか、医療者だけでなく、地域の多様な人々が協力し合い、様々な角度から患者さんをサポートする病院作りがなされていることがとても魅力的でした。



【クリーブランド・クリニック訪問】

ボストン訪問後は、私の友人の知人であり医師の深町先生を尋ねるためにクリーブランドにある病院に足を運びました。クリーブランド・クリニックは米国で最も大規模で敬意を持たれている医療機関のひとつで、心臓部門では全米病院ランキング10年連続一位に輝く病院です。世界90カ国以上から患者の訪問があり、各国の言語の通訳無料サービスが備えられているそうです。

深町先生はこの病院で医学教育に携わると共に、25年以上に渡り人工心臓の研究をされている先生です。訪問以前、人工心臓に対してあまり明確なイメージを持っていなかったのですが、先生のご厚意に与って実物を見せていただくと、それは金属で出来た予想以上に小さな構造物でした(写真・許可を得た上で載せております。)中にはモーターのような構造があり、心臓の弁の働きをする部分とポンプの働きをする部分から成っていました。人工心臓には神経が通っていないので、運動など身体レベルの高い動きをしても常に一定の速度でしか血液を送り出せないという欠点や耐久性などの問題はありますが、人工心臓を用いて時には10年以上もの延命が可能になるそうです。また、興味深かったのは、国によって、こういった機器の認可の基準が違うということでした。日本やアメ



リカでは、認可までに厳しい審査や通過しなければならない動物実験の基準があり認可までには時間がかかりますが、フランスなど欧州では比較的基準が緩く、患者さんの意向次第ではたった1日～3日の延命のために、まだ人への効能が十分に保証されていない人口心臓を使うことが許可されることもあるそうです。心臓移植の待機患者さんが増えてドナーが不足している中、より進化した人工心臓が発明されることは素晴らしいことですが、それと同時に、人々の死生観をとりまく現状はどんどん複雑になってきているようにも感じます。

【ホースセラピー ボランティア】

3月は毎週月曜日に、ホースセラピーが行われている施設で酪農学園の学生と一緒にボランティア活動をしました。ホースセラピーは日本ではまだ認知度があまり高くありませんが、1948年にイギリスで医学的に公認され、現在ではヨーロッパ諸国、ドイツやイギリス、スイスなどで健康保険が適用されており、アメリカでも民間保険を用いてホースセラピーを受けることが可能となっています。起源は古代ギリシャ時代(紀元前460年～370年頃)にまで遡り、戦場で傷ついた兵士たちのリハビリに乗馬が用いられたというヒポクラテスの文献が見つかったそうです。

ホースセラピーは、心理的効果と身体的効果の両方を持ち合わせています。まず、心理的には馬を世話することで心を通い合わせることの喜び、また乗馬による心の安らぎや、馬の温もりを感じることにによる孤独感への癒し、スキル向上によって自信をつける効果があると言います。身体的には、乗馬による高さや振動・リズムなどが脳を刺激したり、馬に乗ってバランスを取ることによって背筋・腹筋を中心に筋力が鍛えられ、腰痛の予防やバランス感覚の改善に効果があるそうです。

このような効果から、ホースセラピーは精神的疾患を伴う患者さんの心の癒しとして用いられる他、腰痛や膝の痛みなどの身体障害のある方、病後療養のリハビリ、その他近年では糖尿病の運動療法にも用いられていると言います。私がボランティアをした **Challenged Champion Equestrian Center** というところでは、主に精神的疾患を持つ子供達のための乗馬教室が開かれていました。子供達が、乗馬の前に毛並みを研いだり、呼びかけたり、馬の頬に寄り添ったりする様子から彼らの馬への愛情が見られました。私達ボランティアは、彼らが乗馬中に万が一バランスを崩した場合に地面に落ちないように備える役として横にそって歩き、私は子供達が乗馬を楽しんでいる様子や馬の歩く蹄の音に心癒されました。アメリカと比べ、日本では人材不足や施設不足、費用の問題などがホースセラピーの普及に歯止めをかけているようですが、精神的疾患を持つ方が増加傾向で高齢化も進んでいる今、ホースセラピーは大きな役割を担う可能性を秘めているのではないかと思います。



【その他学内・課外活動】

今月も少々長くなってしまいましたので、以下ダイジェストとしてご報告したいと思います。



3月27日のイースターでは教会の伝統的なミサに参加しました。イースターはイエスキリストの復活のための祝祭です。新たにクリスチャンとなる方々の洗礼の様子や、祭司からパンと葡萄酒を授かる様子などはとても神聖で、日本の大晦日のお寺の雰囲気にも似た空気が漂っていました。



毎週木曜日には、5月に日本の大学へ短期留学する薬学部の学生と一緒に日本語レッスンをしています。日本語での簡単な挨拶から自己紹介のから始め、会話を楽しみ、時には日本食を一緒に作ったり、ジブリの映画を見たりして和気あいあいと学んでいます。



土曜日は動物擁護施設でのボランティアです。施設では主に犬と猫を保護していて、私とパートナーのボランティアは夕方に犬達とお散歩をしたり、ご飯をあげたり、新しく施設にきた子猫が人に慣れるようにお世話をしたりしています。



3月の末には、地域のガールズスカウトに所属する子供たちに茶道を披露し抹茶を試飲して頂きました。皆興味津々で、私達が茶道を始めるとずっと静かになり、私たちと同じように正座をし始めた子供たちもいて、茶道が幼い子供達にも魅力的であったことを大変嬉しく思いました。

残りわずかとなった留学生活は、友人との時間や、課外活動、最終プロジェクトの波、帰国への準備など、やりたい事とやらなければならない事が山積みですが、最後まで人との繋がりを大切にベストを尽くしていきたいと思います。あと一ヶ月、どうぞ御付き合い下さいませ。

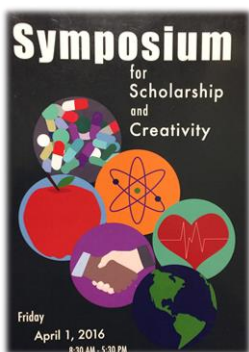
※本報告書に関してご要望やお問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡下さい。 onom@findlay.edu

2015-2016 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 4月

作成日：2016年5月10日 作成者：小野真彩

4月27日ですべての授業と期末試験が終わり、4月末には大学の卒業式が開催されました。大学内には桜にも似た白い花びらの木々が咲き誇り、フィンドレー大学のイメージカラーのユニフォームを来た学生の姿はより輝いていました。今月は、学内シンポジウムやインターナショナルナイト、ファンデーサンデー、アーミッシュの家族の訪問、またフクビUSAの訪問についてお知らせします。月例報告書も今回で終了となりますが、最後まで楽しんで読んで頂ければ幸いです。

【Symposium for Scholarship and Creativity】



川村先生から機会をいただいて、4月1日に学内で開催された Symposium of Scholarship and Creativity というシンポジウムでプレゼン発表をしました。トピックは、日本の国民皆保険制度の成り立ち、現状、そして今後の展望についてです。これまで持っていた基礎知識に加え、厚生労働省や国民健康保険組合の文書、世論調査、その他ニュース記事や日本の医師の先生、医学部の友人からも情報や意見を聞き集めてまとめ、アメリカを含め世界各国の医療を取り巻く現状との比較を加えながら発表致しました。

シンポジウムのための準備は予想以上に大変な作業でした。日本の国民皆保険制度を取り巻いている現状が、社会を形成する様々な要素が絡み合った複雑なものだったからです。しかし、調べれば調べる程にどんどんと疑問が湧いてきて、その度に答えを見つけ出し発表内容をまとめるのは大変面白い夢中になれる作業でもありました。信頼性の高い情報集めから、その考察、スピーチとプレゼンテーションの作成、そして質疑応答のための準備などを通じて、日本の国民皆保険制度だけでなく、医療の質や医師の労働環境、日本の歴史や国民性についても理解を深めることができたように思います。

このように改めて日本について考え直す際、海外での暮らしを通じて日本を客観的に見る事で思考はより洗練されると思います。当たり前だと思っていたことが当たり前で無いこと気がつき、日本で暮らしていたころは考えもしなかった疑問が湧いてきます。アメリカでの留学生活を通じて感じたことでプレゼンテーションの発表内容のひとつとしたトピックが、医療機関へのフリーアクセス性が及ぼしうる弊害についてです。アメリカに来て気がついた日本との大きな違いのひとつのは、アメリカに住む友人がいかに病院を使わないかということです。なぜなら、アメリカは保険制度の違いなどから医療費が高く、「医者にはなるべくかからない」という姿勢が不可欠だからです。それと比較して、日本のフリーアクセス性は素晴らしいものですが、一方で「いつでも病院で医者にかかることができる」という安心感が、人々の「病気や過労の防止・リスクマネジメント」に対する意識向上を妨げている部分もあるのではないかという疑問が湧きました。実際に調べてみると、日本のがん検診率や歯の定期検診率は他の先進国と比べて低く、また健康を維持するために積極的に何かをしている人は20%に満たないということが世論結果に記載されていました。私自身、日本に

いた頃は疲労から体調を崩していたことが時折ありましたが、アメリカでの留学生生活を始めて医者にかかれないう意識を持ち始めてから、精神的にも身体的にも健康管理により気を使うようになり、この9ヶ月間はるかに健やかに毎日を過ごすことができたように感じます。

シンポジウム当日は、友達やお世話になっている先生を含め、これまで会ったこともない教授や学生など予想以上にたくさんの人が私の発表を聞きに教室に足を運んでくださりました。このような素晴らしい機会をいただき、日本の医療や人々の健康意識についての理解をより深めることができ、また発表を通じて多くの人とそれを共有できたことを大変嬉しく、有り難く感じました。

【Funday Sunday】

フィンドレー大学にはキャンパス内の建物の一角にマッサミュージアムという美術館があります。これはアメリカの中でも最大規模といわれている絵本の原画の美術館で、アメリカを始めとして世界各国さまざまな作家の絵本の原画が集められています。時にはこの美術館で作家さんの講演会が開かれたり、コミュニティからの依頼に合わせ幼稚園の子供達から大人まで幅広い方を対象としてツアーやワークショップなども開催されています。水彩画や立体画、切り絵などさまざまな手法を用いて描かれた繊細で絵のタッチが見て取れる原画はとても美しく、私にとって勉強などで疲れた時に立ち寄る癒しの場所でした。このマッサミュージアムで、毎第一日曜日に行われているのがFunday Sundayです。

このイベントには主にフィンドレーの地域の子供たちとその家族が訪れ、留学生や地元の学生のボランティアがそれぞれブースを設置してアートやもの作りのアクティビティなどを行っています。美術館の中では、フェイスペイントやパペットショーなどのブースが設置されており、徳永さんと私はその一角で音楽を演奏しました。今回は、特別な時間を設けてライブとして演奏するのではなく、美術館のバックミュージックとして楽しんでもらうという形での演奏だったのですが、そこにはまた別の楽しさがありました。日本語の歌詞に興味をもった子供が話かけてくれたり、椅子に腰掛けて聞いてくれる家族がいたり、ビートルズのカバーを聞いて話しかけてくださった年配の方がいたり、イベントにこられていた様々な方と交流することができました。ストリートライブの魅力のようなものを垣間見ると共に、こうした場所での一期一会を大変有り難く思いました。



【International Night】

4月15日には、フィンドレー大学の1年の一大イベントでもあるInternational Nightが開催されました。これは、フィンドレー大学の各国からの留学生がホストとなり、大学の学生や地域の方々にそれぞれの国の文化や芸術、料理などを楽しんでもらうイベントです。私達日本人留学生は日本の特別ブースを出して参加しました。イベントの始めにはパフォーマンス部門があり、私達はこちらにきた始めの月に踊ったソーラン節にさらに磨きをかけて踊り、大河ドラマ風の短い劇のシナリ

オを作って演じました。また、マイケルジャクソンのダンスも一部に組み込ませたこともあり、パフォーマンスはとても好評でした。ブースの方では巻き寿司やうどんを作り、私は徳永さんと一緒にお抹茶を点てて振る舞いました。このイベントには、30各国以上の国が出店していました。キャンパスの国際色の豊かさを改めて実感するとともに、1つの国にいながら世界196カ国のうち30カ国の文化に触れることができ、また友達を作ることが出来る環境で学べたことを改めて有り難く感じました。当日はひたすらお抹茶を点て続けていて手首がひどく疲れてしまったのですが、それも当然、なんと来客数は1000人で、これまでに最多の訪問者数だったそうです。

このような環境と比べると、やはり日本は国際的多様性には乏しい場所です。しかし、あらゆる分野でグローバル化が進んでいる今、異文化理解の必要性はどんどん増えていくことと思います。日本でもこれから文化交流がますます盛んになって、多くの人が多様性を享受し、それと同時に日本の良さを再認識することができるコミュニティが築かれていくといいなと感じました。

【Amishコミュニティ訪問】

キリスト教のプロテスタントの一派であるアーミッシュという民族をご存知でしょうか？彼らは、聖書を厳格に解釈し、顔を写真に映したり絵画にするのを避け、また電気や車などの近代文明技術を使わずに農業や牧畜を中心とした伝統的な自給自足生活を送っているドイツ系移民です。現在はアメリカやカナダに20万人以上居るとされており、オハイオ州にもいくつかアーミッシュのコミュニティがあります。以前から彼らの生活に大きな関心を抱いていた私は、あるクラスの先生との繋がりを通じて、オハイオのケントンというところにあるアーミッシュのコミュニティの一家族を訪問する機会を得ることができました。



アーミッシュの一族には服装にも独特の規律があり、女性はワンピースにエプロン、そしてスカーフを頭に被り、男性は黒いパンツの上にシャツとチョッキを着るのが一般的です。私達一同も、少しでも彼らの生活に馴染めるようにと、頭にスカーフを巻いて訪問しました。訪問した一家の方々は私達のための家の中を案内してくれ、彼らの生活やキルトを始めとした伝統的な手工芸の様子や、農業、畜産業の様子を見せてくれました。アーミッシュのコミュニティでは中学校までで学校教育が終わり、その後は両親と一緒に家計を養うために毎日牛の乳搾りをしたり、井戸からの水を汲み出したり、料理につかう焚き火用の薪を作ったりするのが日課だそうです。また、彼らが日常的な移動手段として使う馬車にも乗せてくれました。夕飯にはアーミッシュの伝統的な料理を作っていただき、ランプを灯して、採れたての野菜や新鮮な鶏の料理などを皆で食べました。

アーミッシュの人々の生活の中には、電話やテレビ、携帯電話、車など、私達が普段当たり前として使っている近代技術が一切ありません。しかし彼らがそれを不便と感じている様子は全く見られませんでした。アーミッシュの家族は小さなコミュニティでの人と人との繋がりを大切にし、また牛や馬、犬や猫たちと戯れ、手工芸を楽しみ、歌を歌い、ひとつひとつのことにゆっくりと時間をかけて彼らの生活をととても幸せそうに営んでいました。近代技術は人々の生活を便利にしますが、「生活の便利さ」は必ずしも「心の豊かさ」や「人々の幸せ」の十分条件や必要条件になるわけではないということを実感し、「便利さ」よりも大切なものがアーミッシュのコミュニティにはあり、それが彼らの心を豊かにしているように感じました。

【フクビ USA 表敬訪問】

学業終了後の4月29日に、オハイオのデイトンにあるフクビ USA の会社訪問をする機会を頂き、9月の福井レセプションでお会いした社長の増永さんを始めとして、その他社員の方々と面会致しました。増永さんは、窓枠の部品や電気のカバーの部品、また浄水装置などを作っている工場の中を案内してくださり、それらの製造過程や品質管理のシステムなどについて学ぶことができました。特に、品質管理のシステムはとても細分化されていて、品質を一定に保つための念入りのチェック機構やそれに特化した機械のアルゴリズムなどは大変興味深く、また日本らしい、物事へのきめ細やかさを改めて実感致しました。その後は、会社の皆様と対談する機会を持ち、私はこれまでのアメリカでの留學生活についてプレゼンテーションをさせて頂きました。増永さんをはじめとして、社員の方々はとてもおおらかで暖かく、私の発表も喜んで聞いてくださり、フクビ USA の皆さんととても良い時間を過ごすことができました。留學生活の締めとも言える発表の機会を、このようにたくさんの心暖かい皆さんと過ごすことができ、とても幸せに感じました。



【おわりに】

この9ヶ月間、数えきれない程の素敵な人達、そして多様な人達との出逢いに恵まれ、刺激を受け、この留學なくしては気付けなかったであろう沢山のことを学ぶことが出来ました。こうして無事に最終月を迎えることができたのも、家族や友達、福井大学の先生方、高嶋さんを始めとした福井県国際交流協会の皆様、フィンドレー大学の川村先生、そのほか沢山の方々が私を支えてくださったお陰です。今年度奨学生として選んで頂けたこと、そして、他のどの大学でもなく、フィンドレー大学で学べたことを改めて光榮に想い、また心より感謝しております。帰国後は、ここで得た経験を多くの人と共有し、また留學生活での学びを日々振り返りながら、再び医学の勉強に励んで参りたいと思います。これまで本当に、ありがとうございました。

「まもなく、羽田空港に到着します。着陸までシートベルトをしっかりとお締めください。」約10ヶ月半に渡る留学期間を終え帰国目前となったこの時。私は飛行機の中で、行きの飛行機の中に居た時よりもずっとドキドキする心を必死で落ち着けようとしていました。機内の半数以上は日本人、近隣の席では日本語が飛び交い、元いた環境へと戻っていくことを身に染みて感じました。安心感や、もうすぐ家族や友達と会えるのだという嬉しさと同時に、「久しぶりの日本をどんな風に感じるのだろうか。」「アメリカでの生活に馴染んでしまった分、むしろ日本でカルチャーショックを受けてしまうのではないか。」そんな緊張感が胸を離れませんでした。

ところが実際に日本についてみると、見慣れた日本の景色はすぐに私をリラックスさせてくれました。ああ、やっぱりここが私のホームなのだなあ、留学生活を無事終えて遂に帰ってきたのだ、とホッとすると共に、空港で流れる聞き慣れた音の数々を聞くと、日本を出発した日がまるで昨日のようにも感じられました。たった10ヶ月、されど10ヶ月。其れ程に、アメリカでの留学生活は毎日が充実した学び多き日々であり、一瞬一瞬が濃かったが故に、あっという間に時間が過ぎてしまったのだと思います。

思い返してみると、医学の勉強から離れ、仲が良かった同期の友達とも離れ、休学してアメリカという異国の地で勉強するという道のりは、やはり平坦なものではありませんでした。ただでさえ忙しい医学の勉強の傍らで留学への準備を始め、英語力の向上に努めた日々は挑戦の毎日でした。留学を巡って、それまで道を共にしてきた友人とも意見が食い違って、お互いの心が遠くなってしまったこともありました。それでもやはり、将来医師として社会に貢献するために英語力を高めたい、そして多様な人と会って学びたいという気持ちは変わらず、険しい道を歩む分この1年を意義のあるものにしたいという強い想いと相まって迫り来る壁の数々は良い刺激となり、私のパワーとなっていました。

そして、留学を終えた今、思う事一。それは、この1年が、いかに自分の人生にとってかけがえの無い時間であったということです。国籍や専門分野、年齢を問わず様々な人と出逢い、心理学、文化人類学、ジェンダー学を始め、多様な学問に勤しんだことで、いろんな角度から人の営みを捉えるレンズが磨かれました。今まで気付かなかった沢山のことに気付き、日本人の国民性や、日本の文化、社会の姿、医療に対する見方も新たなものとなり、理解が深まりました。アメリカ社会の中で、各個人が“周りに合わせる”ことではなく、“自分が本当にやりたいこと”を大切に、また周囲もそれに支援的である様子を見て、自分の生き方や、将来自分が医師としてどのように社会に貢献したいのかについても広く想いを巡らせました。また、そうして感じたことを“伝えたい”そして相手を“理解したい”という強い想いが大きなエネルギーとなり、英語を使う力も大きく成長したと実

感しています。そして何よりも、この留学生活を通じて、友達、大学の教授、アメリカで活躍される日本人医師の先生方、ホームステイをさせてくださった沢山のホストパーソン・ホストファミリーなど、数えきれないほどの素敵な人達と出逢うことができたことは、何にも代え難い大きな財産です。

『病気を見ずして病人を診よ』という言葉があります。これは、東京慈恵会医科大学の創設者である、高木兼寛という医師が建学の精神として掲げたものだそうで、福井大学医学部の校舎にも彼の言葉が額に入って飾られています。このフレーズには、患者さんの病気だけを見るのではなく、社会的背景、心理的背景などにも目を向け、患者さんを全人的に治療することの重要性が込められています。私はまだまだ未熟な医学生で、病気を治す力はまだありません。その意味では、医学から1年離れて遅れをとったとも言えるでしょう。しかし、留学生活での様々なバックグラウンドを持った人々との出逢いは、自分が話している人の母国の文化や、その人の社会的・心理的背景に思考を巡らせる想像力を磨いてくれました。また様々な学問を学んだことで、将来医師として、色んな角度から人々の健康をサポートする視点や、考え方の切り口を得る事ができたと思っています。

また、高木兼寛はこう説いていたそうです。「他人をいとおしむ心は、精神的に自立した人間でなければ十分に成熟しない。医師が対応するのは、『意識』を持った病める人間である。医師たる者は、病人の痛みが分かる、温かい心をもった人間でなければいけない。」私は留学以前、大学での勉学、アルバイト、また部活などに追われ、心身共に十分に余裕を持つ事ができていなかったことがありました。しかし、アメリカでの留学生活を通じてたくさんのことを感じ、学んだことによって、心に大きな余裕が生まれ、前よりもっと健康体で居る事が出来るようになって、他者を思いやる心のスペースがぐんと増えたと感じています。将来医師となるからには、忙しい日々を追われることもあるでしょう。そんな中でも、アメリカ生活を通して得た“心の余裕を持つ事”を忘れず、温かい気持ちを持って患者さんやその家族と対話し、痛みに寄り添い、プロフェッショナルとしての知識と技術を持ち合わせて良い信頼関係を築いていける医師になりたいと考えます。

最後になりましたが、私の留学生活を支えてくださった皆様、そして応援して下さっていた皆様へ、心から感謝申し上げます。こうしてアメリカで日進月歩、立ち止まることなく走り続けてこられたこと、そして無事に日本に帰ってこられたことは、私を奨学生として選んでくださった福井県国際交流協会の皆様を始め、家族や友達、先生方など、本当に沢山の方々に支えていただいたお陰です。福井県からの奨学生として、フィンドレー大学で学べたことを、心から光栄に、そして幸福に思います。今後も、この留学で培ったものを磨き、国際的な視野を持って日本のより良い医療の構築に貢献できる医師になれるよう、精進していきたいと思っています。本当に、ありがとうございました。